保育者養成における絵本を用いた音楽表現指導の実践報告

Practice Report of Music Expression Guidance Using Picture Books in Nursery Teacher Training

内　山　菜津子
UCHIYAMA, Natsuko

キーワード：音楽表現指導法、表現（音楽）、保育者養成、幼児教育、絵本

はじめに

本稿は、こども教育宝仙大学（以下、本学）こども教育学部３年生の授業科目「音楽表現指導法演習」（2019年度）の中で行った、絵本を用いた音楽表現活動の指導についての実践報告である。

本授業「音楽表現指導法演習」の授業概要と到達目標、全15回の指導計画については前稿[1]の通りである。本稿で報告する授業内容は、全15回の中の13回目に行った「絵本と音楽」に関する内容である。多くの学生が、それまでに「リトミック」、「わらべうた」、「器楽表現」等音楽を用いた様々な活動に触れ、それらを用いて保育の現場で幼児と活動することを想定した指導の在り方を学んでいる。

幼稚園教育要領における領域『言葉』では、「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること」（文部科学省2017：17）とある。また、領域『表現』では、「表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること」（文部科学省2017：18）とある。これまで筆者は、領域『言葉』にある「言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえる」ことと、領域『表現』にある「様々な表現の仕方に親しむ」ことの１つとして、絵本に出てくる言葉を用いた音楽表現活動を幼稚園で実践してきた。幼稚園や保育所等の保育現場では、絵本は本来、教師が幼児に向けて読む“読み聞かせ”もしくは、幼児自身が“読む”“見る”といった物であるとされている。しかし、表現活動の１つとして絵本を取り上げ、絵本に出てくる言葉のリズムに面白さを感じたり、お話しの場面に合わせて音楽を創作したりと、絵本を音楽的な視点から捉えることで、幼児の表現の幅が広がり、言葉を使う楽しさが味わえるのではないか、と考えている。そこで、本稿では、筆者がこれまで実践してきた絵本を用いた音楽表現活動を授業内で学生に伝えた内容と、授業を受けた学生の反応を報告することとする。

こども教育宝仙大学　非常勤講師

１．絵本を用いた音楽活動の授業のねらいと内容

１）ねらい

本授業では、毎回の授業で学生にレジュメを配布し、そこに本日の活動におけるねらいを記載している。絵本を用いた音楽活動について行った授業では、ねらいを「絵本に音楽が付けられることで幼児が何を感じるのかを考える」、「絵本を通した活動の幅を広げる」の２点とした。

２）内容

本授業の内容を「絵本と音楽」、「絵本と動き（身体表現）」の２つに分けた。

前半の「絵本と音楽」では、“お話しに音楽を付けよう”という言葉の通り、絵本に出てくる言葉に音楽を付けてみることとした。例えば、繰り返される言葉に節を付けることで、子どもから自然に歌が表出される。また、お話の内容や絵からイメージした音楽を付けることもできる。それは、教師が付けることもできるが、子どもがイメージに合う音を探したり、歌ったりする等、創造的な活動に繋がる場合もある。

後半の「絵本と動き」では、“言葉を用いて表現遊びをしよう”と掲げ、言葉から連想される身体表現につい

て実践した。また、言葉をリズムとして捉え、教師が絵本に出てくる言葉を用いたリズム遊びに展開することもできることを示した。

このように、絵本を“読む”だけでなく“歌う”“表現する”といった方法もあるということを学生が体験し、絵本を用いた教育方法の視野を広げられるよう配慮した。

具体的な内容に関しては、次項にて報告する。

２．授業内容

ここでは、授業で実践した内容を報告する。

１）「絵本と音楽」

①同じ教材を「読む」、「歌う」ことの違い

はじめに、“お話しに音楽を付ける”ということへのイメージを学生が持てるよう、多くの学生が知っている『はらぺこあおむし』（エリック・カール1976）の絵本を題材にした。この絵本には、絵本の言葉を用いた歌『はらぺこあおむし』（新沢としひこ作曲）があり、知っている学生も数名いた。まずはそのまま絵本を読み、次に歌を歌いながら絵本を進めていく、という２パターンを続けて行った。そこで、「同じ教材を“読むこと”と“歌うこと”には、どんな違いがあるのか」を学生自身が感じるところから始まった。

先述した『はらぺこあおむし』の歌のように、パネルシアターやペープサート等で用いられる教材には、既に歌や曲が付けられているものがある。授業内では、他に『うちのかぞく』（谷口國博2004）を紹介した。

②即興で音楽を付けてみよう

既存の歌が付けられている絵本（お話）を体験した後に、既存の歌が付いていない絵本（お話）に即興的に節を付けるという実践を行った。

はじめに、筆者が『きいろいのはちょうちょ』（五味太郎1983）を、節を付けて歌いながら読み進めていく。この絵本は繰り返し同じ言葉が使われており、同じ節で歌いながらも場面によって(登場人物の心情に合わせて)歌い方に変化を付けた。これを例として、次は学生一人ひとりが絵本の言葉に節を付けてみようという活動に移った。

即興的な歌作りに慣れ親しんでいない学生も多くいることが想定されたため、出来るだけ言葉のリズムが分かり易く、節の付け易い題材を選択した。題材とした絵本は『きょだいなきょだいな』（長谷川摂子1994）である。長時間頭を抱えて創作するものではなく、その言葉のリズムから受けたインスピレーションを大事にしてほしいという筆者の思いから、創作時間を５分とした。その間、１人で口ずさむだけでなく、付近のクラスメイトと聴き合ったり歌い合ったりする事も良しとした。創作時間終了後、各クラス約３名の学生が発表した。創作した作品は、次項で紹介する。

２）「絵本と動き（身体表現）」

①言葉を用いた表現遊び

ここでは、『だるまさんが』『だるまさんの』『だるまさんと』（かがくいひろし2008）を題材として、筆者が幼稚園現場で子どもたちと表現遊びをした実践例を挙げながら、身体表現を用いた活動を実際に行った。『だるまさんが』では、絵本に出てくる「だるまさんが」の言葉のリズムに合わせて身体を揺らせ、めくったページで起こるだるまさんと同じアクションをする。この活動には、言葉を口ずさみながらリズムに身体を乗せて動くリズム的要素と、次に何が起こるだろうとワクワクする高揚感とを味わうことが出来る。同様に『だるまさんの』では、言葉のリズムの後に自分自身の体の部位を見つけたりする遊びとなることから、乳児向けであること、そして『だるまさんと』では、相手と共に出来ることから、３歳児の親子ふれあい活動や４、５歳児の集団遊びでも活用出来ることを知らせた。

②おはなしごっこ

絵本の中には、同じ展開が何度も繰り返されるものが多くある。それらは幼児にとって、次の展開を予測したり、自ら一緒に口ずさんだり出来るものである。この、繰り返しのある絵本を題材に、筆者は幼稚園現場で多くの“おはなしごっこ”を子どもたちと実践してきた。本授業では、その中から『もりのおふろ』（西村敏雄2008）を紹介し、実際の幼児の様子を物語と共に伝えた。

この他、オノマトペや言葉を用いた表現遊びとして扱える教材として『もこ　もこもこ』（谷川俊太郎1977）を紹介した。

３．結果と考察

ここでは、前項２（授業内容）で示した中の「絵本と音楽」に関する学生の反応や感じたことを、本授業のミニレポートとして学生が記した授業の感想や実際の学生の様子から報告する。

ミニレポートは、講師が投げ掛けた３つの質問に答えていく形式とした。質問は、以下の３つである。４つ目は質問ではなく、学生自身の感想である。

１．同じ教材（絵本）を「読む」ことと「歌う」ことで、どんな違いがあると思いますか？
２．「きょだいなきょだいな」に節を付けることは、どのように感じましたか。
３．今日の授業を受けて、あなたが保育者として子

どもに絵本を通した音楽活動をしてみたいと感じましたか。
4．その他、今日の授業を通して感じたことを自由に書いてください。

1）同じ教材を「読む」、「歌う」ことの違い

授業では、まずはじめに節を付けずに読む、そして節を付けて読む（既存の曲または即興的な節）ことを続けて行い、学生は「読む」ことと「歌う」ことを同時に体感した。また、学生は、絵本を聴く側だけではなく、歌うまたは創作するという側の立場も体験した。表１は、本授業を受けた後に記入した、ミニレポートの質問１での学生の回答を、筆者が分類したものである。

表１から考察できることは、以下の通りである。

絵本を歌う事で、お話しのイメージ・雰囲気・世界観に変化が見られると感じた学生が多くいることがわかった。それは、“子どもも一緒に歌える”、“リズムに合わせて身体を動かしたくなる”という音楽の特性を学生自身が自然と感じ取り、子どもたちが絵本の活動に参加している姿がイメージ出来たからなのではないか、と考えられる。また、メロディやリズムを付けて歌うことで、読み手側のイメージに固定されてしまうのではないか、

表１．ミニレポート質問１の回答

分類	読むこと	歌うこと
話の内容理解	・絵に集中しながら、ストーリーを理解できる ・目で見て聞いて、楽しむことができる ・文字や言葉を覚えたり出来る ・絵本の内容や楽しさは十分伝わる。 ・登場人物の気持ちや言葉がわかりやすい。	・テンポや音程で場面や状況を理解する事ができると思う ・絵本の内容が理解しやすいように感じた。 ・リズムがあって内容が入ってきやすい。 ・字が読めない子でも歌になると覚える。 ・台詞も歌になってしまうので、心情が理解しにくい。 ・長い話が苦手な子どもでも、歌にすることで聞きやすくなったり、話を理解しやすくなるのではないか。
雰囲気	・落ち着いた雰囲気で行うイメージ ・午睡前などの気持ちを落ち着かせる時に行うイメージ。	・みんなでメロディーに合わせて、楽しい雰囲気になる。 ・一緒に歌うことで、より絵本の世界に入り込むことができる。 ・同じ繰り返しでも楽しくなる。 ・楽しく元気に見ていられる。
イメージ・世界観	・物語そのものを味わう ・子ども自身がその絵本のイメージを想像して楽しむことができる ・聴いている人のイメージで決まる。 ・読み方次第で世界観の伝わり方が変わる。 ・絵に集中して、そこから感じ取れる世界観がある。 ・子どもが自由にイメージを膨らましやすい。	・「こんなイメージの世界でもあるんだ」と子どもが少し違う角度から絵本を捉えることができる ・知っている物語の世界が、さらに広がる気がした。より参加しているように感じた。 ・イメージを持ちやすくなる。 ・イメージの仕方が変わったりより愛着を持てる。 ・曲のメロディによって、楽しい描写や悲しい描写などがより分かりやすくなる。 ・読み手のイメージに引っ張られる。 ・音楽を通して世界観が伝えられる。 ・自分も絵本の世界に入った感覚になれる。 ・メロディがあることで、イメージが固定されやすいが、皆で同じイメージを共有できる。
身体表現		・身体全体を使って絵本の世界を表現することができる。 ・静かに聴くだけでなく、身体を自由に動かしながら聴ける。 ・全身で絵本を楽しむ感覚を知る事ができる。
子どもの参加	・基本、先生が１人で読んでいる感じがする。	・子どもが覚えやすいリズムで歌うことで､口ずさんでくれたりすると思う。 ・リズムがあった方が楽しく飽きずに集中して聴ける。 ・子どもたちも一緒に歌いながら楽しんで読むことができる。 ・子どもたちみんなが楽しく歌ったりしてイメージが残る。 子どもたちも自然と口ずさむことができる。 ・「楽しい絵本」と認識して積極的に読み聞かせに参加してくれると思う。
表現		・絵や文字だけでは表すことのできない場面の様子を具体的に表す事ができる。
その他		・絵や文字だけでは表すことのできない場面の様子を具体的に表す事ができる。 ・展開が分かっていても、次のページをめくるのが楽しくなる。 ・子どもの興味や関心を引きやすくなる。 ・歌うことが楽しくなり､その絵本を何回も読みたいと感じるのではないか。

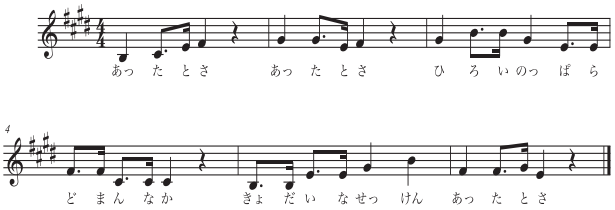
と考える学生もいた。それと同様に、読むことの良さとして、子ども一人ひとりが絵本のイメージを想像して読み進めることができる、とする学生もいた。このように、絵本を読むことの良さと、絵本を歌うことの良さの両者に気付いたのである。そして、表１の結果から、保育現場を想像した際、読むことは「静かに聞く」、歌うことは「一緒に楽しむ」という雰囲気の違いに気付いた学生が多くいたことから、学生自身がこの授業を通して“絵本を歌う”という活動の雰囲気を味わうこととなった、ということがわかった。

２）即興で音楽を付けてみよう

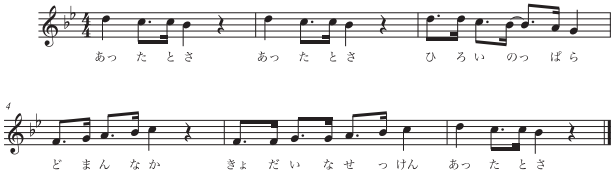
ここでは、絵本『きょだいなきょだいな』の一節「*あったとさ　あったとさ　ひろいのっぱら　どまんなか　きょだいなせっけん　あったとさ*」に、学生が即興的に節を付けて歌った実践を報告する。

次の譜例１～３は、それぞれ別のクラスの学生が発表した節を、筆者が譜面に起こしたものである。

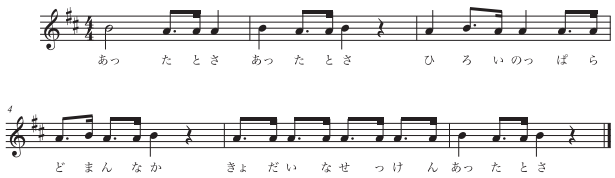
譜例１



譜例２



譜例３



譜例１～３にあるように、どの学生も言葉のリズムを取り入れている。例えば、「あったとさ」に含まれる「タンタタタン」というリズムである。そこに、どの学生もを付けていることから、子どもたちの気持ちがリズムに乗り易いよう、とっさに工夫されていることがわかる。実際、学生自身も、多くの学生の前で歌う事に少し恥じらいながらも、どの学生も笑顔で楽しそうに歌っていたことが、筆者の印象に残っている。リズムに関しては、どの学生も類似したものであり、特に付点のリズムを付け易いということがわかった。

一方、メロディは、一人ひとりのイメージが表現されている。譜例１と譜例２は、一見似ているように思えるが、譜面に起こしてみると、音の並び（上行、下行）だけでなく、調性の違いにも気付いた。調性によって曲や歌のイメージが変化することから、学生一人ひとりのイメージの違いがあったことがわかる。また、譜例３は、わらべうた調の旋律となっており、子どもにとって身近な遊び歌のような印象を受ける。２音のみで構成されており、子どもにとっても歌い易く、覚え易いメロディとなっている。

この３名の作品の他にも、メロディを付けずにリズムのみで構成し、間の手を入れた作品も生まれた。筆者は当初、学生は即興的な創作に対して苦手意識を持っているのではないかと考えていたが、実践してみると、多くの学生が学生同士で聞き合う等意欲的に取り組み、一人ひとり個性のある作品が生みだせることがわかった。

実践を終えた後に学生が記したミニレポートの質問２「『きょだいなきょだいな』に節を付けることは、どのように感じましたか」の回答の中に、次のような記述があった。

・友達の作った節と自分の作った節を聞き比べて、人によってこんなにも印象が違うんだなと思いました。
・違う人が歌う事によって、その場面を想像する際の色合いが変わるなと思いました。
・節を付けることは難しかったが、色んな付け方があるからこそ面白いと感じた。
・自分の感じたままに歌えるので楽しく感じた。
・その人が絵や場面をどのように捉えたのかがよくわかると思う。
・意外と歌を付けることは簡単だったが、次の文に繋げるために節を付けることは少し大変かなと感じました。
・自分のオリジナルを考えるのが大変でした。
・難しいかなと思いましたが、楽しい雰囲気などを考えて節を考えられたのでよかった。
・子どもも一緒になってのりやすいなと思いました。
・普段読み聞かせをする時よりも、わくわくできるように感じられた。

上記の記述は一部の学生のものであるが、ここで紹介していない学生の回答にも、上記にあるような内容と同様の記述が見られた。

即興的な節作りに「難しい」と感じた学生も見られた

が、想像していたよりも簡単に、楽しく取り組むことが出来たとしている学生も多かった。これを機に、自身で即興的に歌作り、音楽作りをするということに前向きに取り組んでほしいと筆者は願っている。また、仲間の作品も聞き合い、違う節で歌うことで絵本のイメージに変化が齎されるということに気付いた学生も多くいたことから、個人の創作だけでなく、互いに聞き合うという機会も大切であったことがわかった。

３）絵本を用いた音楽活動への興味・関心

これまでの授業を受けて、学生自身が絵本を用いた音楽活動に対して興味や関心を持ち、保育現場で実践してみたいと感じたのかどうかを、ミニレポートの回答をもとに見ていきたい。

ミニレポートの質問３「今日の授業を受けて、あなたが保育者として子どもに絵本を通した音楽活動をしてみたいと感じましたか」という問いに対して、全ての学生が「してみたいと思った」と回答している。その理由、思いとして次のような記述が見られた。

・ピアノにのせて歌うことは苦手だけど、その場で考えたり即興でこどもたちと考えながら一つの作品を作ることができるから
・子ども達が、絵本を通して音楽の楽しさを知る事ができるきっかけにもなると思うから
・絵本を読むだけで終わるのではなく、そこから音楽をつけてみたり、子ども達と節を付けてみたりと音楽活動に繋げてみたい
・私達大学生がこれだけ楽しむことができた活動なのだから、子ども達にもこうした活動を通して「絵本への興味関心」「音楽表現の面白さ」「自分の感じたことを表現する楽しさ」を感じてもらいたい
・絵本は今まで静かに聞くものだと思っていましたが、歌いながら活動をすることで子ども達が楽しいと感じたり、新しい物に出会えるかもしれないと思ったから
・絵本を歌で歌う事によって、こんなにも活動が楽しくなり子ども達も楽しめるのであれば是非してみたい。
・子ども達がもっと絵本を好きになるのではないかと思ったから
・絵本とは読むだけでなく全身で感じることのできるとても楽しいものだということを子ども達にも伝えることができたら嬉しい

上記は一部の学生のものであるが、どの学生も「子どもが楽しめると思ったから」、「実際にやってみて楽しかったから」、「絵本の面白さ、良さを感じられるから」等の意欲的な記述が見られた。それは、子ども目線で捉え、実践してみたいという思いも多くあるが、何よりも、学生自身が「面白い」、「楽しい」と感じたことが大きな要因なのではないか、と筆者は考えた。また、「自分にも出来そう」と思えるほど、簡単に取り入れられると感じた学生が多かったようにも考えられる。

おわりに

本稿では、絵本を用いた音楽表現活動の授業内容と学生の反応について報告した。

学生は、はじめ「絵本」と「音楽」との繋がりや結びつきについてイメージが湧きにくく、どういう事なのかと疑問に思っていたようである。しかし、筆者が実践しながら紹介する中で、学生自身に次第に新たな発想が芽生えていったように感じられた。それは、授業中に、学生が絵本を見ながらつい筆者の歌に合わせて口ずさんでいた事や、授業内での即興創作体験への意欲的な姿勢、そして授業後のミニレポートでの気付きにより、わかったことである。

幼児教育・保育は様々な活動を複合的に捉えるものである、と筆者は考えている。今回の授業は、「絵本」、「言葉」、「音楽」等普段であれば別の分野で捉えられるであろう活動を、まさに複合的に掛け合わせたものの実践であった。今後も、学生がここでの体験や学びを活かし、音楽を様々な分野と結びつける活動を展開していく、という発想を持つ教師となれるよう、指導していきたい。

註

1　内山菜津子2019「保育現場に求められる音楽表現指導の能力育成に関する実践報告」こども教育宝仙大学紀要 Vol.10（49-54）

引用文献

文部科学省2017『幼稚園教育要領』

教材として取り上げた絵本

エリック＝カール著、もりひさし翻訳1976『はらぺこあおむし』偕成社
かがくいひろし2008『だるまさんが』ブロンズ新社
かがくいひろし2008『だるまさんの』ブロンズ新社
かがくいひろし2008『だるまさんと』ブロンズ新社
五味太郎1983『きいろいのはちょうちょ』偕成社
谷川俊太郎1977『もこ　もこもこ』文研出版
谷口國博2004『うちのかぞく』世界文化社
西村敏雄2008『もりのおふろ』福音館書店
長谷川摂子1994『きょだいなきょだいな』福音館書店